陳舜臣さんを語る会通信

NO.11　Ju.　2020

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2020年6月1日

陳舜臣　中国歴史小説の本線をなす作品の一つ　『山河在り』

陳舜臣さんは、文庫本『中国の歴史　七　』(1991 講談社文庫)の「文庫版完結にあたってのあとがき」で次(下の枠内)のように書いています。特に、枠内傍線③「**私がほんとうに書きたいのは、くどいようですが近現代であり、残された歳月も考慮して、歴史記述と小説との二つの手段で、それをはたそうと思いました**」という表現に、強い気持ちが感じ取れます。その結晶の一つが、本号で取り上げた『山河在り(上)(中)(下)』(1999-00 講談社)で、これは、傍線①の通り、『阿片戦争』、『太平天国』、『江は流れず』に続く、陳舜臣さんの中国歴史もの本線・幹線をなす作品です。

傍線②で、陳さんは「戊戌変法から義和団と書きついで行くべきだった」とおっしゃっていますが、この両事件は『青山一髪』で記述されますので、本線に『青山一髪』を加えてもいいかと思います。

さて、『山河在り』ですが、この作品は、関東大震災（1923年）から日中十五年戦争前夜までを描いていますが、陳さんがおっしゃる、「ほんとうに書きたい近現代」のゴールは、まだまだ先です。この点については、本号４頁でふれたいと思います。

ところで、この時期の中国の政治背景は複雑です。次頁に、歴史流れ図「『山河在り』の時代背景」を入れました。辛亥革命から、第二次国共合作あたりまでを俯瞰するのには適していると思います。参考にしてください。　　（編集委員　橘雄三）

文庫版の表紙

『中国の歴史 七』（一九九一 講談社文庫）「文庫版完結にあたってのあとがき」より

『史記』の作者司馬遷は、自分の生きた時代、すなわち漢の武帝の時代を書きたいために、さかのぼって、五帝紀から筆をおこしたといわれています。意識すると否とにかかわらず、誰しも自分の生きた時代に最も強い関心をもつはずです。（中略）

①私は東アジアの近代は、アヘン戦争にはじまると思い、二十数年前に、小説『阿片戦争』を書きました。そして、そのつぎの時代の『太平天国』も小説に書きました。されに日清戦争をテーマとする『江は流れず』という小説も書きました。

私の故郷の台湾は、日清戦争の結果、清国が日本に割譲した土地です。私の父はそのころに生まれています。いよいよ私の生きた時代に近づいてきました。

②『江は流れず』のあと、順序からいえば、戊戌（一八九八）変法から義和団（一八九九―一九〇一）と書きついで行くべきだったのです。げんに戊戌変法や義和団事件についての資料を集め、小説の構想も練っていました。けれども、私の胸中に、司馬遷のことが、一種のわだかまりとなっていました。歴史は連続していて、流れているものです。ある一部だけを切り取ることにたいする不満ーというより不安が強まってきました。

私が『中国の歴史』を書くことを思い立ったのはそのためでした。アヘン戦争から太平天国と、時代をくだって書き進めていたのが、こんどはさかのぼってみなければならない、とおもったのです。正直言って、当時、馬王堆漢墓の発掘や秦の兵馬俑坑の発見など、考古学関係の大ニュースがつづき、そのことが私の関心を古代にひき戻す作用をしたことは認めなければなりません。けれども、基本的には、私は時代をさかのぼってみようという意欲にうごかされていたのです。（中略）

③私がほんとうに書きたいのは、くどいようですが近現代であり、残された歳月も考慮して、歴史記述と小説との二つの手段で、それをはたそうと思いました。（中略）

二十一世紀が近くなりました。同じ時代を生きた人たちと、中国の歴史をふりかえってみることを、私は深いよろこびとしています。

一九九一年二月十八日　六十七回誕生日に　　陳舜臣

『山河在り』の時代背景

1912.1～中華民国成立　首都 南京　孫文臨時大総統
1912.2　袁世凱、宣統帝の退位（2/12）を実現させる。臨時大総統、大総統、皇帝(15.12.12-16.3.22)。16.6.6 袁世凱急死
1915.1　日本（大隈重信内閣）、二十一か条要求。最後通牒の5月7日は「国恥記念日」に。

［袁世凱後の北京政府］
（中華民国の正統政府を主張）
12年にわたる軍閥時代

1916.7-17.7　黎元洪(大総統)
段祺瑞(国務総理)

1917.8-18.10　馮国璋大総統)
段祺瑞(国務総理)

1918.10-22.6　徐世昌(大総統)
段祺瑞(安徽派)は、国会で多数派工作を行い、気心の知れた徐世昌を選任して馮国璋(直隷派)を大総統の地位から引きずり下ろした⇒安徽派と直隷派の対立、表面化⇒安直戦争へ

1919　パリで第一次世界大戦の講和会議開催。中国は戦勝国側だったがドイツ権益の回収ならず。⇒ **五・四運動**

1920.7 安直戦争
［安徽派］段祺瑞←日本支援
［直隷派］曹錕、呉佩孚←英米支援
［奉天派］張作霖が［直］側に与し、［直］の勝利。

1922.4-5月　第１次奉直戦争
1920年に成立した奉直連合政権内における対立が原因
［奉天派］張作霖←日本支援
［直隷派］曹錕、呉佩孚、馮玉祥←英米支援。［直］の勝利
※馮玉祥：西北軍閥の首領。安徽派の段祺瑞に従い、のち直隷派に接近。1924年の第２次奉直戦争では奉天派と結ぶ。

1922.6-23.6　黎元洪(大総統)
「誰もが反対しない大総統」として、隠居生活を楽しんでいた黎元洪を擁立

1923.10-24.11　曹錕(大総統)

1924.9-10月　第２次奉直戦争
［奉天派］張作霖
［直隷派］曹錕、呉佩孚
［直］側馮玉祥の内応もあって［奉］の勝利。結果、呉佩孚の下野、張作霖の北京進出となった。

1924.10　馮玉祥、クーデターをおこし、北京を掌握。**溥儀、紫禁城退去**

1924.11-26.4　段祺瑞(臨時執政)
馮玉祥と張作霖の支持を受け返り咲く

1927.6-28.6　張作霖(大元帥)
蔣介石の北伐軍に敗れ、奉天(現・瀋陽)に帰る途中、日本軍に爆殺される。

地方には地方で、多くの大小軍閥が割拠していた。各省に派遣された都督（督軍）も軍閥そのものであった。また、各地を自己の王国のごとく支配していた在地軍閥のなかには、省議会と一緒になって、中央政府が派遣した軍閥を追い払う場合もあった。

［広東軍政府］
北京の段祺瑞政権が日本の支援を受けて全国統一に乗り出す形勢となったことに危機感を持った孫文は上海から広州に移り、「約法」を守るための政府を樹立、大元帥となる。辛亥革命の理念に固執する孫文と西南諸軍閥の連合政権であったため内紛によって３度断続。

第１次1917.9-20.10　18年5月、孫文、大元帥を辞し、代理を残し、自らは上海へ去る。上海で**中国国民党結成**。

第２次1921.5-22.6　上海で雌伏していた孫文を救ったのは**陳炯明**であった。そして、この孫文政権を崩壊させたのも**陳炯明**だった。

第３次1923.3-25.6　中小地方軍閥を金で雇い陳炯明を追い出す。1924年10月、**商団事件**(指導者陳廉伯)。

1919.10　**孫文、上海で中国国民党を結成**
秘密結社中華革命党を五・四運動の影響下に改組・改称し、大衆政党とした。(1912年、中国同盟会を中心に、公開の政党へ改組した国民党とは別)
コミンテルンはこれを革命的ブルジョワジーと規定

ソ連邦の支援（コミンテルンの指導）
↓
1921　**中国共産党創立大会（上海で）**
委員長　陳独秀

1923　孫文、ヨッフェ共同声明（連ソ・容共・扶助工農を確認）
1924.1　**第一次国共合作（－27.7まで）**
軍閥に頼らず独自の武力をもちたい。ソ連も革命軍の必要性を説き支援
1924.6　**黄埔軍官学校開校。校長、蔣介石**

1925.3　孫文死去
1925.5.30　五・三〇事件（上海、広州、香港）　反帝国主義運動

1925.7　広州国民政府樹立（主席：汪兆銘）孫文時代の大元帥統治の軍政府を解体し、国民党中央執行委員会が指導する国民政府を樹立
1926　**蔣介石を総司令として北伐開始**

1927.1　長江流域に進出、武漢政府を立てる（主席：汪兆銘）
但し、蔣介石は、軍を率い南昌に留まり武漢政府に合流せず。蔣介石には、武漢政府は共産党に乗っ取られた政権と映っていた

1927.4.12　**上海クーデター**
（蔣介石、反共クーデターを断行）

1927.4　**蔣介石、南京に国民政府を樹立**
（主席：蔣介石）

誰もが知っている、瑞金にある「紅井」と石碑
吃水不忘挖井人
時刻想念毛主席

1927.7　**武漢政府に残った汪兆銘ら国民党左派も共産党員を放逐**
追い出す
1927.8.1　**南昌起義**
共産党が独自の軍隊をもった最初。八一建軍節これに呼応して秋収蜂起。すべて失敗
1927.9末　**毛沢東、井岡山山岳地帯へ**。三湾改編。毛沢東、朱徳らの指導の下に、国民政府の掃共戦争に対抗、地盤を拡大
1927.12　広東コミューン
1931　**瑞金に中華ソヴィエト共和国を樹立**
（主席：毛沢東）※ソヴィエト：労働者と兵士の代表による評議会（労兵会）
1934　**長征へ**

1927.9　武漢政府、南京政府に合流

1930末-1934　国民党、５次にわたる囲剿

1928.4　北伐再開
.6　**蔣介石率いる国民革命軍北京入城**
1931.9.18　**柳条湖事件　日中戦争始まる**
1932.1-5月　上海事変（第一次）
1937.7.7　盧溝橋事件
1937.8　上海事変（第二次）

満鉄「あじあ」号
S田鉄道博物館蔵

1937.9　**第二次国共合作（－46.7まで）**
1937年11月20日　国民政府は、日本軍の首都南京侵攻を前にして重慶への「遷都宣言」を発表し、移転を開始
1937.12.13　日本軍南京占領
1945.9.2　**日本降伏**

20.5.28 橋雄三作成
「紅井」は編集委員撮影

『山河在り』の内容（登場人物ほか）

《1.『山河在り』の登場人物 》

『山河在り』の登場人物については、下の表と次ページ、「架空の登場人物　連家・温家系図」を参照願います。

（1）「同舟会」メンバー

1923年、大震災後の東京。温世航が住む連家の邸、「双煙館」に、同舟会のメンバーが集うところから小説は始まります。

その10人ほどのメンバーが、後にそれぞれ、孫文の広東軍政府と対立する勢力、「商団」に属したり、世航と共同出資して事業を興したり、美しい暗殺者になったり、国民党政府の要職に就いたり、その役割を演じます。メンバーの一人は、大震災後、行方不明になっています。彼はヨッフェの連絡員で、そのことが行方不明に関係しているのではとの噂があります。ヨッフェとはソ連の大物政治家で、1924年の第一次国共合作に繋がる人物です。

（2）連家・温家、ほか金順記の人々

中国大陸の香港、広州など南方から、上海、北京、そして東北、更に台湾まで、いたるところで起こる出来事を主人公の分身となって情報を収集・提供するのが連家・温家ほか金順記の人々です。

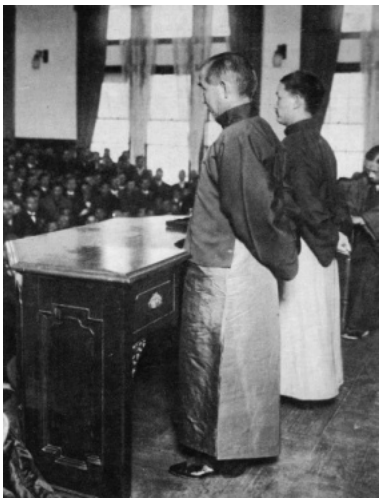
連紹桓は新聞記者となって馮玉祥将軍の本営に出入りし、金順記の社員だった徐炳年は黄埔軍官学校を卒業、国民党正規軍の中堅になります。また、連紹柏は家出をして僧侶になりますが、結果として、紹柏に会いに普陀山までやってきた世航と陶芳韻を再会させる役割を演じることになります。

	登　場　人　物
同舟会メンバー	同舟会は、温世航が住む連家の邸、双煙館に集う中国人留学生の会。呉康、陶芳韻、趙錫堂、劉継泰、張淑妍、郭浩安、李欽票、唐鼎権、王瑶香
温世航	主人公。「金順記」の一族に生まれ、日本で育つ
陶芳韻	同舟会メンバー。作中、温世航の最初の女性
増田綾子	京都在住の霊感師。温世航の二人目の女性
滝口信子	王希天の知人滝口弾山の娘。温世航の妻になる
連含章	世航の母
連紹桓	上海連家の当主、遠滋の子。新聞記者
連紹柏	台湾連本家の当主、遠初の次男。家出をし僧侶に
連如星	世航の父方の祖母。“アメリカ婆さん”
楊景珠	世航のいとこ。米国生まれ。
王希天	中国出身の社会運動家。震災後、失踪
呉康	同舟会。震災後、行方不明。ヨッフェの連絡員？
陸鳴泉	太玄会会長の兄。雅号は雷芽山人
マクミラン	陶磁器の世界的コレクター
髙述	元宦官の古美術商

《2．陳さんが重く取り上げた出来事》

『山河在り』は上、中巻は共に10章、下巻は11章、合計31の章立てになっています。

まず、「希天失踪」「二通の手紙」、二つの章を割いて、1923年の大震災時の混乱の中で行われた二つの事件（大杉栄事件と王希天事件）が描かれます。大杉栄は著名なアナーキスト、社会運動家ですが、憲兵隊本部に連行され、甘粕大尉に殺害されます。『山河在り』では、この事件をこの時期の状況背景・導入に使いながら、中国出身の社会運動家、王希天について詳述されます。温世航は、王希天について調べる過程で妻になる女性滝口信子と出会います。



神戸高等女学校で講演する孫文
陳徳仁著『辛亥革命と孫文』より

次は「五千円始末」「秋の送別」、二つの章で、孫文の最後の来日と「大亜細亜主義」講演（1924年、神戸）が描かれます。巧みに小説風に仕立てられています。

三つ目は、「戦火、上海に及ぶ」「血戦」「停戦」、三つの章で、柳条湖事件のあとの上海事変が描かれます。その臨場感はさすがです。また、「停戦」の章で、上海の虹口公園で行われた天長節祝賀行事中の爆弾事件にも言及されます。杖をついて、ミズーリ号上の降伏文書調印の場に臨んだ重光葵外相の不自由な足はこのときの遭難が原因です。

このほかでは、紫禁城収蔵美術品の流出、次々起こる故宮関係者の死、紫禁城景福宮の火災など一連の事件に、元宦官の古美術商高述、世界的陶磁器コレクターのマクミラン、ほか、陸鳴泉などが絡んできます。このテーマは、『青玉獅子香炉』を執筆した陳舜臣さんには自家薬籠中の物と言えるでしょう。

そして、時代背景として、北方の、安直戦争、二度にわたる奉直戦争など、袁世凱後の12年にわたる軍閥戦争、南方の、孫文の広東軍政府と陳炯明のクーデターや陳廉伯の「商団事件」が詳述されます。

また、共産党の創立や国共合作・離反、井岡山・瑞金での国民党との戦いにも言及されます。

執筆が叶わなかった『山河在り』に続く時代　&「連家・温家系図」

《陳さんに書いてほしかった共産党及び現代中国》

『山河在り』を読み終わって、「大震災のあと行方不明になった呉康はどこで何をしているのだろう」「秘密工作員陶芳韻とその仲間たちはこのあとどうなるのだろう」などなど、気持ちが残りました。

陳舜臣さんは『山河在り』の中で、簡単にですが、共産党の創立、国共合作・離反、南昌起義、井岡山・瑞金での国民党との戦いなどに言及しています。

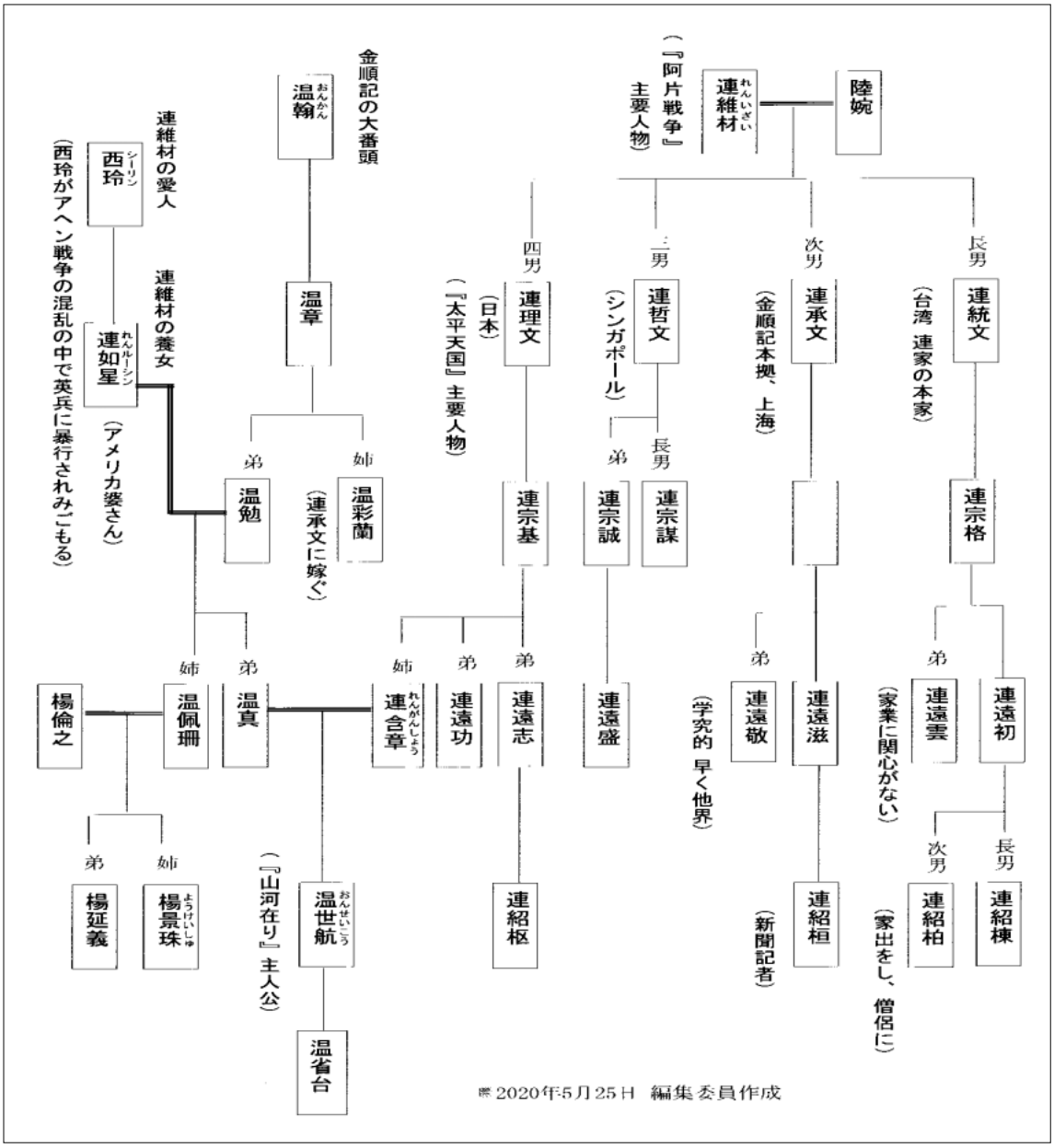
共産党の勢力伸張に関連し、陳さんの頭には、引き続き彼らに、次の小説でも登場させようとの構想があったのではないでしょうか。

「私がほんとうに書きたいのは、くどいようですが近現代であり、残された歳月も考慮して、歴史記述と小説との二つの手段で、それをはたそうと思いました」。

これは、本号１頁にあげた陳舜臣さんの言葉ですが、『山河在り』に続く時代をテーマにした、本線の歴史小説が執筆されることはありませんでした。残念です。

瑞金の「中華蘇維埃共和國臨時中央政府」跡（編集委員撮影）

1994年、宝塚歌劇場で講演中にたおれ、五ヶ月の入院、リハビリをしながらの執筆が続きます。阪神淡路大震災もありました。『チンギス・ハーンの一族』と『山河在り』が、この時期の所産です。2008年にも同じく脳内出血があり、結果的には、『群像』連載中の『天空の詩人 李白』が絶筆となりました。

架空の登場人物　連家・温家系図

陳舜臣さんの作品、『阿片戦争』『太平天国』『山河在り』に登場する架空の人物、連家・温家の人びとを纏めてみました。いずれも、『山河在り』の記述を基本にしております。「長男」、「次男」、「兄」、「弟」なども文中の表現に拠っています。